

私の戦争体験

(70年前の子供の記憶)

平成27年(2015)4月

伊丹から始まる記憶	2
父の出征	3
家庭の防空	3
隣組	5
子供の遊び	5
疎開	5
初めてのご飯と温泉	6
城崎の子供達	7
城崎のお祭り	7
食料と燃料	7
高潮	8
敗戦	8
父の復員	9
再び伊丹へ	9
入園・入学	10
ギブミー・チョコレート	10
キューバ糖	10
闇市	11
ハイパーインフレ	11
物々交換	12
戦後の医療	12
血液型	12
卵の証明書	13
ツベルクリンとBCG	13
ペニシリン	13
海人草	13
学校給食	13
伊丹を去る	14

私の戦争体験

(70年前の子供の記憶)

私はお蔭様で現在は海外旅行を楽しみながら平和に過ごさせていただいているが、幼いころの厳しい記憶がある。

私は昭和15年(1940年)6月生まれ、この年は皇紀2600年、日本は破竹の勢いで中国に勢力を伸ばしていた時であり、国を挙げてお祝いムードに浸っていたそう。敗戦は満5歳で迎えた。おそらくおぼろげながらも太平洋戦争の記憶がある最後の世代だろう。戦中戦後の記録は多々あるが、その殆どが、戦記、原爆、大空襲などで多くの一般庶民、特に幼い子供の目から見た生活の記録は殆どない。私の記録を反戦とか人権とか政治的に用いるつもりは全くない。ただ史実を記録しておきたいだけである。私もいずれ遠からずこの世を去る身であるからと友人に勧められるまま、私の記憶を書いておくことにした。戦後70年に当たり、有史以来の特異な時代に幼少期を過ごした者の義務のような気がする。特定の目的はなく、後日何かの役に立てば望外だが、私自身が自分の薄れゆく記憶を守るためでもある。

幼いころの記憶は鮮明なところもあるが、ほとんどが断片的で時間的な前後関係が分からないことが多い。また後に両親などから聞いた話が実体験のように思えてくることもある。また思いもよらない実体験の記憶が突然蘇りまた消えてしまうこともある。断片的なことを書き並べても読む人には理解し難いだろう。そこで解説を入れるとまた現時点での想像や主観が入ってくる。これは仕方がないことだ。そこでなるべく体験した事実と想像・伝聞を読み分けられるように書いたつもりである。

伊丹から始まる記憶

私の出生地は大阪府ということになっているが、自分の記憶は兵庫県伊丹市の阪急伊丹線稲野駅近くの家から始まる。現在の稲野駅東口と大手前短大との中間あたりだ。母方の祖父の大きな門構えのある立派な家があり、その西筋向いに我が家があった。その家は現在ストリートビューで見たところ「飲んで歌って」という居酒屋になっているようだ。その東隣が伯父(母の兄)の家だった。祖父は三重県伊賀の出身、6歳で大阪へ丁稚奉公に出て、後に大阪で独立して建材商を営むいわゆるたたきあげの旦那さんだった。昭和50年頃一度伊丹を訪れてみたが、祖父の家はアイシン精機のクラブになっていた。母はその一人娘でお嬢様だったのだろう。

父は婿養子で戦争がなければ多分将来家業を継ぐ予定だったのだろう。当時祖父はよく知らないお婆さんと二人で住んでいた。祖母(母の母)は早く亡くなったので、この人は後妻だったらしい。後に戸籍を調べたところ入籍されているがその後どうなったのか全く不明。隣の伯父は長男で当時では珍しく早稲田大学のマンドリンクラブの出身で、何でも知

っている優しい伯父さんだった。子供がいないので私をかわいがってくれた。戦後には甲子園のラグビーや宝塚にも連れて行ってもらった。今考えるとこの伯父は多趣味、道楽者で歌舞音曲、書道、水泳、囲碁将棋は有段者、仕事以外は何でもできるという人だった。そのため祖父は私の父を商売の後継者に選んだのかもしれない。私が成人してからこの伯父から聞いた話は花街のことが多かった。親父（私の祖父）の“つけ”で遊んでいたようだ。面白かったのは偶然親子で座敷が隣り合わせになって親父の行動が筒抜けだったことがあったそうだ。この伯父の家には五郎という名の大きな犬がいた。私はこの犬が好きだった。ハナタレ小僧だった私の鼻をよくなめてくれた。よく吠える犬だったが私にはあまり吠えなかった。多分私を弟分と思っていたのではないか。

私の家族は両親と学齢で5年上の兄との4人、家は大きく広い庭があったが借家だったようだ。疎開した後はこの家に戻ることはなかった。母にはもう一人兄（次兄）がいた。この伯父は豊中市で歯医者をやっていた。その長男健一ちゃんが生まれて間もなく亡くなった。その時の葬儀が私の最初の日付が確かな記憶ではないかと思う。長い行列を作って歩いた。大人の人が白い布をかけた箱をかついでいた。焼き場ではみんな藁の束のようなものを一つずつ箱のそばに置いた。この藁に火を点けたのだろう。この時、人は死んだら火で焼かれると知った。後に調べたら昭和20年4月のことだった。私の4歳10か月の記憶だ。

父の出征

私の父は私が生まれてから2度兵役に就いたようだ。20歳の現役で入隊したかどうかは聞いていない。いなくなってから一度帰ってきて地元の警防団という消防隊のようなことをやっていたと思う。敵の飛行機が飛んできたら警戒警報のサイレンが鳴るのだが、いよいよ近くなると敵機来襲として火の見櫓の鐘が鳴るのだ。父は時々この鐘をたたく役割をしており、母が「危ない」とよく怒っていた。高いし、機銃掃射で一番狙われやすいのだろう。

その後赤紙（召集令状）がまた来たらしく、出て行ったまま終戦まで帰らなかった。出て行くとき私に相当手古摺ったようだ。出て行くと知った私が泣きわめくので朝早く私が寝ている間にそっと出かけたらしい。むろん母と兄は駅まで見送った。その後目を覚ました私が誰もいないことに気付いて大泣きしながら駅まで駆けていった。駅では出征兵士を見送る人波でいっぱいだった。泣きわめく私を見て父はさぞつらかったことと思う。私の記憶の中には泣きながら走ったことと日の丸を持った人波だけが残っている。

家庭の防空

家には大きなラジオがあった。このラジオは後年、兄と一緒に分解して調べたところビク

ターの高周波増幅1段付きの6球（真空管が6本使っている）スーパー・ヘテロダイナミックだった。おそらく当時としては最高級だったと思われる。このラジオが「ビー」と大きな音を出すと危ないのだ。「チュウブブンジョウホウ」と繰り返す。ごく最近知ったことだが、これは「中部軍管区情報」を略して「中部軍情報」とっていたのだ。これに続いて「敵機編隊が潮岬上空を北上中・・・」と続くのだ。

多分昭和19年秋ごろからだろうが、伊丹飛行場が近かったせいか殆ど毎日昼夜を問わず空襲警報のサイレンが鳴った。近くにあった日本精工や三菱の工場も狙われたのだろう。夜は明かりが外に漏れないように電燈には黒い布をかぶせた。電燈の真下だけが明るいのだ。真下だけが透明で回りが青黒く光を通さないようになっている防空電球というものもあった。

昼間の空襲はB-29が編隊を組んで飛んでくるのがよく見えた。焼夷弾をバラバラと落とすのもよく見えた。子供心にあまり怖いとは思わなかった。すぐに慣れてしまったのだろう。外に遊びに出るときは常に防空頭巾（現在の防災頭巾と同じ）をかぶせられてその上からヘルメットをかぶった。我が家にはヘルメットが一つしかなく、たいていは兄がかぶり、私は鍋をかぶせられた。そのうち金属献納で鍋は供出させられたので陶器の鍋になった。これは重くてとても子供には無理だった。兵器を作るため金属が極端に不足しており家庭の金属まで調達したのだ。兄の制服の金ボタンも陶器に替わっていた。

爆撃や機銃掃射は頻繁にあったが、狙われるのは殆ど工場で、我々の民家が直接狙われることはまだなかった。しかし怪我人はよく出た。それは米軍の玉ではなく日本の高射砲の弾丸の破片が落ちてくるのだ。高射砲の弾丸は当たらなくても上空で爆発するので、必ず破片は落ちてくる。一度近くに落ちているのを見て拾ったが包丁のように薄く尖った恐ろしいものだった。すぐにおまわりさんに取り上げられた。

家の中では天井板を何枚か取り外すように指示があり、防空検査という小父さんが調べに来たことがあった。その時は何の事だかわからなかったが、後に聞いたところでは、焼夷弾が屋根を突き抜けてきたとき、天井板で止まるとすぐに火災になる。天井板がなければ床まで落ちるので消火ができるということだった。焼夷弾は火のついた油が飛び散るのでから本当に効果があったのかどうか疑わしい。

あるとき大阪、尼崎への空襲があり空が真っ黒になった。太陽が赤くぼっかりと見えた。そのとき天から大量のお札が降ってきた。燃えたお札が灰になって飛んできたのだ。真っ黒に焼けても形や図柄がそっくり残っているのだ。当時のお札はこんな燃え方をしたのだ。今のお札もそうなのかどうか、試したことはない。

いよいよ空襲が激しくなったためか裏庭に防空壕を掘ることになった。といっても母と子供だけで掘れるわけがない。どこからか小父さん達が何人も手伝いに来た。まだ兵隊に行かない人もいたようだ。平らな庭に掘るのだから横穴式はできない。深く掘って屋根の代わりに畳を重ねてあった。後には土が盛ってあったから更に手を入れたのだろう。屋根が饅頭のように盛り上がった縦穴式である。子供の私には防空壕に入るのが楽しみだった。母が豪の中に非常食として炒り米を茶筒に入れて保管していたので、それを少しずつ食べさせてもらえるのが嬉しかった。

隣組

ときどき家の前の道路に野菜や芋など配給の食糧が小分けして並べられることがあった。後に母に聞いたところによると、各戸で平等に分けてもどうしても多少の量の違いや、品物の組み合わせの違いが生じる。取りあいになるので、並べておいてくじ引きの順に好きな物を取ったのだそうだ。各所帯の人数差がどう関係していたのかは疑問ではあるが、今となってはわからない。

殆どの家には大人の男はおらず女所帯ばかりだった。おばさんたちが消火訓練をやっていた。さすがに竹槍を見た記憶はないが、どこの家にも「ひけし」という道具があった。竹竿の先に荒縄を短く切ってバサバサとつけてある。江戸時代の纏のようなものだ。これを水につけて濡らして火を叩くのだ。このためにどこの家の前にも防火用水という風呂桶のようなものがあり、常に水を入れてあった。時々偉そうな小父さんが来て号令をかけて、おばさんたちが一所懸命火消しの練習をしていた。役に立ったのかどうか。

子供の遊び

子供の遊びは殆ど戦争ごっこだった。わけわからずただ「突撃!」「打て!」「退却!」などと「わーわー」やっていた。肉弾三勇士をまねたものや吹き矢もあった。吹き矢の的にはルーズベルトやチャーチルの顔が書いてあった。

空襲があると米機は銀紙のテープを大量に落とす。ひらひらと美しい。後で知ったがレーダーの電波を反射させ狂わせるためだ。子供はそんなこと知らず落ちてくる銀紙を拾って喜んでいて。しかしそのテープを引っ張って遊んでいると必ずおまわりさんに取り上げられた。

疎開

昭和20年の初夏だと思うが疎開することになった。戦況が厳しくなり爆撃が近くまで迫

ってきたのだ。祖父と隣の伯父達は残ったが我が家の3人は兵庫県北部の城崎温泉（現在の豊岡市）へ疎開した。

その前、あるとき伊勢の祖父（父の父）が伊丹を訪ねて来たとき、近くに爆撃がありものすごい音がして家ががたがたと揺れた。我々家族は慣れていたのでさほど驚かなかったが、祖父はぶったまげたらしく、「こんなところに住んどったらあかん、あかん」と言っていた。戦後知ったことだが、そういった伊勢の祖父の家も後にごく近くまで爆撃で焼かれていた。祖父の意見のためかどうか知らないが、多分母方の祖父が伝手を辿って子供のいる我が家だけを疎開させてくれたのだろう。どんな伝手かは知らないが小さな一軒家だった。昭和60年ごろ城崎を訪ねてみたがすっかり変わっており、それらしい家が一軒あったが定かではなかった。

ともあれ今のJR伊丹駅と思われるところから汽車に乗った。一家三人に歯医者伯父が付き添ってくれた。5歳にもならない私も含めてみんないっばいの荷物を背負っていた。汽車が出発直前になって母が大きなリュックサックをホームに置き忘れたことに気付いた。母はあわててホームへ飛び出して重いリュックサックを見つけて持ってきた。汽車は動き出す、当時の汽車のドアは自動開閉ではなく何時も半開きだった。母は必死の形相で飛び乗った。火事場の馬鹿力だ。「女は弱しされど母は強し」まさにこれだった。きゃしゃな体の母が重い荷物を持ってよく飛び乗ったものだといまでも感心している。列車は満員ぎゅうぎゅう詰めで座った記憶がない。途中「福知山」というところを通った記憶があるが、あとはどこを走ったのか子供にはわからない。福知山線から山陰本線だったのだろう。福知山で乗り換えたのかもしれない。

初めてのご飯と温泉

初めての城崎温泉は空襲警報もない閑静な町だった。最初数日は旅館に泊まった。城崎温泉は街の中央に柳並木のある川が流れており左岸に温泉（銭湯）がいくつもあり、右岸に旅館が並び、石の太鼓橋がいくつも架かっていた。我々の泊まった旅館の場所は有名な「一の湯」の対岸あたりだったと思う。ここで私にとって生涯忘れられない大事件が起こった。最初の食事のとき女中さんが美味しいものが何もなくて「すみません、すみません」といながらお膳を運んできた。子供の私にもお膳があった。汁と、何かおかずがあったのだろうが、問題はご飯だ。家で使っていた陶器の茶碗ではなく、漆器のお椀に白い綿のようなものがのっていた。物心ついてからは豆や大根の入った“しゃぶしゃぶの”おかゆしか食べたことがなかったので、これが食べ物とは思わなかった。兄達が美味しい美味しいといいながら食べだした。私は不安だった。母に「これ食べられるの？」と聞いて大笑いになった。それでもおそろおそろ食べてみたらものすごく美味しかった。銀シャリだったか麦飯だったかはよく覚えていないが、かたいごはんだった。世の中にこんなに美味しいものがあるなんて想像もできなかったのだ。でもこの食事が長く続くことはなかった。

城崎では温泉だけは何時でも入れた。旅館でも民家でもみんな銭湯へ行くのだ。私は風呂といえば伯父の家で使わせてもらう家風呂しか知らなかったの、初めは大きく深い浴槽が怖かった。銭湯は今でも同じと思うが、地蔵湯、柳湯、一の湯、鶴の湯、まんだら湯があり、私はすぐに道順を覚えて母達を案内した。

城崎の子供達

私は近所の子供達とすぐに親しくなった。言葉のなまりや方言が違うのでよくからかわれたが、あまり気にならなかった。これは小さな子供の特権だ。まず驚いたことがあった。飛行機の編隊が飛んできたなら、伊丹ではすぐに防空壕か家に避難した。ところがここでは子供たちが音を聞いて外へ飛び出してくるのだ。飛行機を見るのが楽しみなのだ。爆撃されたことがないのだ。防空頭巾など誰もかぶっていない。毎日友達に教えてもらって鮎やノウカングズといわれたハゼを釣ったり、山で木の実を取ったりした。家に持ち帰ると母が喜んでくれるので一生懸命だった。ある日イナゴを大量につかまえてきたら母が悲鳴をあげていたが、背に腹は代えられず、炒って醤油で煮てくれた。

学校へ通う兄は違ったらしい。兄が朝家を出てから学校へ行かずいつもどこかにかくれているのを発見した。なぜ学校へ行かないのか私には不思議だったが、今思うといわゆる疎開者へのイジメによる不登校だ。後年兄と話したところ、私が城崎を懐かしく思っているのに比べ、兄にはいい思い出はなかったようだ。

城崎のお祭り

終戦の年の秋と思われるが、城崎ではお祭りがあった。おそらく秋祭りだと思われるが、大きなだんじりがいくつも出て、いずれもチンチキンドンと鉦や太鼓でにぎやかだった。だんじり同士をぶつけ合う喧嘩もあった。伊丹の悲惨な状態を知る私には子供ながらここはなんと呑気な処かと思った。今思い出しても不思議だ。あの時代にまだお祭りをやる余裕があったのだ。

食料と燃料

母は誰一人知る人もいない土地で、配給が十分あるわけでもなくどうやって毎日の食料を入手していたのだろうか。とうとう母には聞くことはなかった。戦前は祖父が金持ちだったからお金は援助してもらっただろうが、お金で食料が手に入る時代ではない。時々近所の半農半漁のようなおじさんが持ってきてくれたことはあったが、そう度々ではない。

以下現在の私の想像だが、近所の大家さんの二階に女性が一人で住んでいた。この人はわりに母と親しくしていた。お互いに寂しい者同士気が合ったのかもしれない。今思うにこの女性はどうも地元の有力者の妾だったようだ。その人がよく家に来ていたので有力者のルートから幾らか横流ししてくれたのではないか。

母は父がいつ帰ってくるか知れず、いつ伊丹へ帰れるかもしれない、山陰の雪深い冬をどうして過ごすか不安であったに違いない。そこで秋には食料を蓄えなければならないがあてがない。あるとき母がどこからかりヤカーに山盛りの柿を買ってきた。渋柿ばかりでおそらく地元の人には殆ど食べないのだろう。これを来る日も来る日も皮をむいて干し柿にしていた。この時の体験で、私は今も干し柿作りが好きだ。またやはりリヤカーに何杯も短い竹の筒を買ってきたこともある。何か工芸品の切れ端だったのだろうか。縁の下にいっぱい入れて冬の燃料にと考えていたようだ。

高潮

半年余りの城崎滞在中に我々の住む川下の町内は、二～三回水浸しになった。雨が降っていたので台風だったのかも知れない。大潮だったのかもしれないが家の前の田んぼが水浸しになり、だんだん水位が高くなってきて庭に入ってきて床上ぎりぎりまで水が漬いてきた。我々家族には怖かったが、近所の人たちには珍しいことではないらしく、全く平気だったようだ。いつものことで慣れていたようで、ある一定以上は水位が上がらないことを承知していた。確かに水は床上には来なかった。庭に小さな船が置いてある家もあったし、我が家にも小さな脚立のようなものが幾つかあった。畳が濡れないように持ち上げておくのだ。それにしても玄関や台所の土間は水浸しになり、トイレの肥壺も水でいっぱいになり流れ出る。不衛生極まりない。現在は土手を築いてあるのだろと思う。

敗戦

疎開先の家にはラジオがなかった。新聞はあったが、裏表2ページだけのペラペラで、それも毎日ではなかったようだが、子供の私には関係なかった。あるとき新聞に大勢の人が死んでいるような大きな写真が載っていた。当時の新聞には写真が少なかったのでよく覚えている。子供心に何か大変なことが起こっていると思い、新聞を見るのが怖かった。これが広島か長崎の原爆だったのだ。その後前述の近所の二階のおばさんが家に飛び込んできて、コーブクしたとって騒いでいた。子供の私には幸福と降伏の区別もなく何のことかわからなかったが、兄が「戦争に負けたんや」と教えてくれた。私には悲しみなどはなく、母が「お父ちゃんが帰ってくるかもしれん」といったのが嬉しかった。

父の復員

昭和20年の秋ごろ父が帰ってきた。父は幸い外地に出ることはなく内地にいたので比較的早い復員だった。当然母と文通はしていたのだろう、城崎へ来た。私は父が道に迷うといけないので、早くから駅まで一人で迎えに行った。現在での想像だが、当時の汽車が時間通り走ったとは考えられない。よって母も何時迎えに行くべきか解らなかつたはずだ。だから何も仕事のない私が一日中駅で待っていたのではなかろうか。思えば5歳にしては我ながらしっかりしていた。厳しい環境が子供を育てたのだろう。父は大きなリュックサックいっぱいのお土産を持っていた。中身は毛布や飯盒など軍用品ばかり、軍隊で山分けしてきたのだろう。それでも私は軍用の乾パンがあったのが嬉しかった。その夜は軍隊毛布を敷いてもらって寝た。その後のことはよく覚えていないが、後に父に聞いたところによると、私が寝た後事件があった。

父が貧しい夕食を見て「俺が帰ってきたのにこの飯は何だ！」と母を怒鳴りつけたのだそう。そうしたら目を覚ました私が涙を流して「兵隊さんは何を食ったんや！おらは毎日これでも大ごちそうやったぞ！」とって父の頭をポカポカ殴ったのだそう。よほど父にはこたえたらしく、生涯このことを語り続けていた。食料は軍隊優先だったのだろう。今の北朝鮮のようなものだ。

父が復員しても大阪の祖父の店は丸焼けで仕事もなく、ただの失業者だった。仕方なく毎日魚釣りに出かけていた。海や川が近く、子供のハゼ釣りとは違って大物の魚をよく釣った。私にとっては父と魚釣りに行ったり、温泉に行ったり楽しい日々だった。しかしこのまま厳しい冬を越すのは難しいと考えたのだろう、伊丹へ帰ることになった。

再び伊丹へ

どうやって帰ってきたかはっきりした記憶がないが、付近一帯は爆撃を免れていた。帰ってみると元の家は他人が住んでいた。仲良しの犬の五郎はいなかった。死んだと聞かされたが、今思うに食糧難の時代だから強制的に殺処分されたのではないか。我々は祖父の家に入った。同様に四国へ疎開していた歯医者伯父一家も祖父の家に入ってきた。伯父一家は夫婦と娘が二人、我が家は父母と我々兄弟二人、それに祖父と母の異母妹にあたる同志社大学に入ったばかりのお姉さん、前にいた知らないお婆さんはいなくなっていた。合計3家族10人が住むことになった。それでも焼け跡のバラックに住むよりは余程ましだった。だが以前にも増して食糧難はひどかった。城崎から持ち帰った干し柿は貴重なご馳走だった。今でも私は干し柿が好物だ。

入園・入学

翌年春私は幼稚園に入った。その翌年昭和22年には小学校へ上がった。伊丹市立南小学校という名で、新設校だったので兄とは違う学校だった。まだ運動場を作っているところで、米兵がブルドーザを使って整備していた。ブルドーザーの音、大きさ、圧倒的な力に驚いてポカンと見とれていて女の先生に叱られた。新しくできた教科書は新聞紙のようなもので、家に持ち帰って鋏で切って本のように綴じてもらうのだ。それでも教育勅語を廃止した革新的教育の始まりで、男女共学の一期生だ。一年生からひらがなを習った一期生でもある。それまではカタカナから習ったのだ。

電力不足で毎晩停電があった。夜の明かりは傘のついた石油ランプが主だった。油は異様な臭いがしたので鯨油だったのではないか。ともかくホヤという火を入れるガラスのコップのようなものがすぐに油煙で黒くなる。これをきれいに拭くのが子供の仕事だった。祖父に拭き方を細かく指導された。祖父は丁稚小僧のころ毎日の日課としてやっていたそう。その後父が何処からかバッテリーと充電器を入手してきた。これがなかなか重宝で毎晩夕食時には豆電球を点けた。油の臭いもない。この電源をいじっているうちに私は電気に興味がわき、後の職業にまで影響することになった。

ギブミー・チョコレート

子供の私はいつも腹をすかせていた。食べるものが手に入るなら何でもした。闇市で博打の見張り、警官がきたら親方に知らせる。そして後で蒸し芋を買ってもらう。進駐軍の兵隊に近づいては「ギブミー・チョコレート」。気のいいヤンキーはいろいろくれた。走ってくるジープに日の丸の手旗を振るとチョコレートやチューンガムと交換してくれた。手旗がなくなると、クレヨンで紙に日の丸を書いた。女性の写真を持っていると沢山くれた。戦前父が写真の趣味を持っていたので家にはいろんな写真がいっぱいあった。その中から、親戚でもなんでも女の写真はみんなチョコレートに換えた。しまいには母の写真まで持ち出す始末だった。米兵とは結構英語で会話した。我ながらあさましい一年坊主だった。私の人生でこのころが一番「実用英会話」ができたのかもしれない。いわゆるパングリッシュ（パンパン・イングリッシュ）というやつだ。最初チューインガムというものを全く知らず美味しいので飲み込んでしまい家族に大笑いされたこともあった。

キューバ糖

戦時中には砂糖は超貴重品で甘いものは殆ど食べられなかったが、終戦後あるときから急に砂糖が大量に出回った。キューバ糖といったからアメリカがキューバから持ってきたの

だろう。茶色いザラメの砂糖が主食として配給されたのだ。カロリーだけで計算したらかなり主食に近いのかもしれない。これを食べる方法としてカルメン焼なるものがあった。オタマジャクシのような小さな鍋に砂糖を入れて熱して溶かす。これに膨らし粉といわれる重曹のようなものをタイミングよく入れて小さな擦りこきの棒でかき回すと大きく膨れ上がる。そこで火を落とすとカリカリの饅頭のような形ものができる。これがカルメン焼だ。甘いだけだが何とか食える。上手に作るには砂糖の量、膨らし粉の量、溶かすタイミング、止めるタイミングなど結構コツが要る。なぜか私は上手だったので、家族中の分を私が作ったりした。

闇市

終戦の翌年には闇市ができていた。大体駅前の広場にあった。バラックやテント、筵張りや露天など雑然と汚い小さな店が集まっていた。なぜ闇かというと、当時は統制経済で殆どの品物が配給制度で自由に売買することが出来なかった。それを当局の目を盗んで売買しており、多分当局も半ば黙認していたのだろう。最初は蒸し芋など食べ物だったが日々扱われる品物の種類が増えていくのが我々子供にもよくわかった。イスラム圏でよく見られるスークやバザールのように雑然としていたが、賑わっていた。傷痍軍人が白い服を着て義手や義足を付けて物乞いしている姿も多かった。傷痍軍人の中には「リンゴの唄」「異国の丘」「鐘の鳴る丘」などの歌をアコーディオンやハーモニカで弾いている人もいた。むろん万引き、かっぱらい、博打など犯罪の温床でもあった。我々悪ガキの遊び場所でもあった。上手に店屋の手伝いをすると飴玉くらいはもらえた。戦争孤児の浮浪児も大勢いた。親もなく、家もなく万引きで生活していたのだろう。それに比べればいくら腹が減っても、親もあり、家もあり、学校にも行ける私は恵まれていた。当時万引きという言葉は使わなかったと思う。万引することを盗む、失敬する、屁をかます、などといった。今でも法外な高値のことを闇値というが、その語源は闇市などで当局の目を盗んで行われる闇取引の値が異常に高かったことの名残だろう。

ハイパーインフレ

私が使ったことがある最低の金額は5厘だ。カツオブシと呼んでいた芋飴に白い粉をまぶして、小さな鯉節のような形をした駄菓子で1個5厘だった。ところが殆ど毎日値上がりし、あっという間に1円になった。200倍だ。今思うに典型的なハイパーインフレだった。世の中が少し落ち着きかけてアイスクャンデーが売り出されたときは一本1円だったが、たちまち10円になった。

このころお札に切手を貼って使っていたことがある。子供には何のことだかさっぱり解らなかったが、今考えるとインフレを抑えるためにお金の流通を抑えたのだろう。一人あた

りのお金の使用量を制限したのだらう。先ず銀行預金の引き出しを制限した。現金で持っている人には使用許可分だけの切手を発行して、札に張らせた。いくらお金を持っていても切手以上には使えないのだ。小切手も換金できない。こうしてお金の流通を押さえておいて更に通貨を切り替えた。元の通貨を旧円とし、一定量だけ新円に交換した。残った旧円は紙くずになる。ものすごく乱暴な政策だが、ハイパーインフレを抑えるためには仕方がなかったのだらう。これで戦前金持ちだったわが祖父も裸同然にされたようだ。

もう一つの乱暴な政策として農地改革があった。戦前の農業は大地主と土地を借りて耕作する小作人がおり、大地主が圧倒的権力を持っていた。この土地を、その時借りていた小作人に無料で与えてしまうことになった。これで大地主はなくなり農業者は平等になり人権が守られたといわれている。しかし今となつては、離農者が増え、只でもらった土地を売って大金持ちになる土地成金がいるのには違和感を覚える。むろん当時の子供の知ったことではないが。

物々交換

ハイパーインフレの中ではお金の価値が全くわからない。毎日値上がりするということは毎日お金の価値が下がるということだ。母達は配給の食料だけではとても生活できないのである手この手で食料を工面していたようだ。お金もないが、あっても価値がない。よく覚えているのが物々交換だ。母はお嬢様育ちだったので着物をたくさん持っていた。これを農家へ持って行って平身低頭して野菜や芋と交換してもらうのだ。私は母によくついて行った。当時の農家は威張っており、米をもらって帰った覚えはない、たいてい芋だった。私には価値はわからなかったが、女の大切な着物をわずかの食料と交換するのはさぞ悔しかったらうと想像できる。このように着物を脱いで食いつなぐ事を“たけのこ生活”といった。農家としても価値のないお金をもらってもしょうがなかったのだらう。統制経済下ではこのような取引も闇なのだ。うっかりおまわりさんに見つかることと取り上げられることもあったそうだ。

戦後の医療

戦後日本の医療は急速に進歩したようだ。昔、肺結核は誰もがかかりうる死病と恐れられていたが、ツベルクリンやBCGのおかげで非常に稀な病になった。抗生物質の効果も大きかった。子供だった私にも少し医療に関する経験がある。

血液型

戦時中、多分昭和19年の夏ごろと思われるが、兄と一緒に近所の開業医のところへ血液

型を調べてもらいに行った。暑い日に耳を切られたことを覚えている。当時は何時空襲で怪我をするかわからないので、人はみんな胸に住所氏名と血液型を書いた布を付けることになったようだ。結果、私が B 型、兄が A 型だった。以後ズーと胸にそのように書いていた。大人になってもそう信じていた。35歳頃だったが、たまたま献血したとき私は A 型だといわれた。同じころ兄も病院で A 型ではなく B 型といわれたとのこと。つまり昔の医者が二人の血を取り違えていたのか或いは検査がデタラメだったのだ。

卵の証明書

昭和18年頃と思うが、私は小児ぜんそくがあり、かつよく風邪をひいた。近所の医者が往診に来てくれるのだが、心音を聞き、脈を取り、いつも同じ薬をのまされるだけだ。要するに他に薬がなかったのだろう。そして医師は卵の証明書を書いてくれる。栄養を採って体力を付けさせたのかもしれない。当時鶏卵は超高級食品で医師の証明書がないと買えなかったのだ。そのため私は風邪をひくのが楽しみでもあった。

ツベルクリンとBCG

戦後小学校で全員ツベルクリン反応を調べて、陰性の者には BCG が接種された。当時の日本の医者はこのような物を扱った事が無かったのだろう。私はツベルクリンと同じところに BCG を注射された。校医は前述の血液検査の医師と同じ人だった。その後その注射の跡が化膿して半年以上膿みつづけて現在もケロイド状の醜い跡が残っている。その医師は高級軍医だったそうだ。日本の医療はこの程度のものだったのだ。

ペニシリン

昭和21年の秋に妹が生まれた。父は娘が生まれて大喜びしていた。ところが半年くらいして赤ん坊の妹が肺炎になった。当時子供の肺炎は死病といわれたようだ。往診に来た医者が「ペニシリンが手に入ればなあ」といったのを覚えている。私はペニシリンなど知る由もない。次に覚えているのは二～三日後のことだろう、その医師が進駐軍から手に入れたとあって妹の小さなお尻に見るからに痛そうな太い注射を打っていた。これがペニシリンだった。妹は間もなく回復し、今も健在だ。「アメリカは凄い!」、子供でも日米の医療格差を強く感じた。

チョコレートも、チューインガムもペニシリンもブルドーザーも何でもアメリカは凄い。ついこのあいだまでの“憎き鬼畜米英”が羨望の的になっていた。

海人草

当時は衛生状態が悪く大抵の子供はお腹に回虫や蟯虫といった寄生虫を宿していた。貴重な食物を寄生虫に食われていたのだ。そこで学校で時々虫下しとしてマクリとか海人草というものを飲まされた。藻類の一種らしいが大鍋で煮て煮汁をバケツで教室へ持ってきてコップに一～二杯ずつ飲まされた。不味くて飲みにくいですが確かに効果があり翌日お尻から白く細長い虫が出てくることがあった。

学校給食

欠食児童を救うために始まった。確かにクラスには朝食は食べてこない、昼に家に帰っても食べるものがない子供がいた。比較的恵まれていた私自身も欠食することは時々あった。そういう意味では天の助けであったが、味など何の配慮もなくただ命を救うため薬のように我慢して食べさせるだけだった。給食は一日おきくらいでコッペパン一個とミルクだった。このミルクは脱脂粉乳をお湯で溶いたもので物凄く不味く1クラスにバケツ一杯来るのだが大抵飲み残した。米軍の軍用犬の餌だという噂があった。しかし栄養不足の我々には有難いものではあったはずだ。たまに米軍払い下げの石鹸のように大きなチョコレートが配られた。これは最高の喜びだった。

伊丹を去る

そうこうしているうちに昭和23年8月、小学2年生の時、父の新しい仕事があったためか、父の郷里の三重県へ引っ越すことになった。75歳の今、思い返すに私の人生で昭和18年から4～5年の記憶が一番密度が濃いように思う。幼少期の記憶だから前後関係や、正確さはよくわからないが、ともかく多くの場面が浮かんでくる。

その後もいろいろあったが、世の中はだんだん平穏になり誰でもが経験するような普通の少年時代だった。

以上が私の戦争体験だが、幼児体験は今でも体に染みついている。開発途上国へ行くと貧しく腹を空かせた子供がいる。つい昔の自分を思い出してしまう。

特にインドでは町中どこにでも子供のルンペンが物乞いに来る。自分の幼いころの記憶が蘇り食べ物を与える。しかし日本人とは家庭教育が違う。もらっても礼も言わず、嬉しそうな顔をしない。右手に与えたらすぐに左手を出す。両手に与えたら後ろに隠してまた手を出す。これがインドの子供だ、こちらは腹が立つ。飢餓の中でも日本人はここまで落ちぶれていなかった。日本人には悪ガキといえどもそれなりの矜持のようなものがあったと思う。もらった人には礼を言った。

インドの子供が悪いわけではない。日本の貧しかったころは、皆が等しく貧しかった。ところがインドでは宮殿の様な家で豪華な生活をする人も少なくない。これでは子供の心は荒む。日本人の常識を持って外国を判断してはいけないということを思い知った。また上から目線でもいけない。